

# 眠れる農地に描く夢 実現の日を目指して



**profile** 現在は20歳代を中心とした職員13人が参加。2025年はサツマイモの苗6万6千本の確保を目標に活動中。

# Spotlight

スポットライト



## 遊休農地でサツマイモの生産に取り組む JAとうや湖の皆さん

**農**家の高齢化や後継者不足から遊休農地の増加が全国的な問題になっていきます。多くの農家が対策に知恵を絞る中、とうや湖農業協同組合（JAとうや湖）の若手職員が結成したプロジェクトチームが全道でも珍しい取組を進めています。

チームのメンバーは農協に就職して5年以内の若手職員。農協の業務と遊休農地活用のための農業を両立する「半職半農」をテーマに2023年に活動をスタートしました。

収穫した農産物をただ出荷するのではなく、あえて困難なことに挑もうと活動について話し合う中で注目したのがサツマイモ。南国を主な生産地とするイメージが強いですが、近年の温暖化などもあり、寒冷地での栽培が増えつつあり、収益性も高い作物です。とはいえ道内の先行事例はごく少数。他に先駆けて育て方を確立し、農家と共有することで遊休農地を減らそうと挑戦を始めました。

課題となるのは苗の安定供給。単価が高く、まとまった数量の確保が難しいことが理由です。そこで、始めに仕入れた3千本の苗を自ら育苗して数を増やし、安定供給につなげることを目指して技術を積み重ねることにしました。メンバーは農作業に携わった経験がなく、参考にできる資料も少ないことから育苗は試行錯誤の連続。財田地区の育苗施設で成長を見守る傍ら、農家からトラクターの運転を学んで畑を耕し、専用肥料を開発しました。中心メンバーの一人、日野陽平さんは「道内の育苗はマニュアルもなくゼロからのスタート。育苗から商品開発まで皆で調べました」と振り返ります。

昨年は30トを無事収穫。寒暖差の大きさのおかげか甘味が強く、糖度は35・2度とメンバーも驚くほど高い数値に。イベントで販売した焼き芋は好評を博し、食品スーパーの惣菜として商品になるなど魅力を広めています。

昨年冬には芋焼酎を試作し、本年12月の発売に向けて商品化のアイデアを練っている真っ最中。「生産者として、農協職員として一日も早く生産技術を伝えられるようになりたいです」と意気込む日野さん。眠ったままの農地を呼び覚ますため、未来を担う若手の夢が膨らみます。

## 東奔西走



雪が少なくなっていると言われる昨今ですが、今年の胆振は特に少雪のよう。雪かきが楽なことはありがたいですが、気候変動の影響かと考えてしまいます。とはいえ「帳尻合わせ」が来ないことを祈っています。(D.Y)  
先日弟の進学準備をするため、母も含め3人で買い物に行きました。弟と母が話し合いながら買い物している姿を後ろから見てみると、2年前、私が洞爺湖町へ引っ越してくるときも大変だったなと思い出に浸りました。(Y.A)

## 町公式LINEを友だち追加!

イベントや防災など様々な情報に加え、フルカラー版広報紙もご覧いただけます!

